



元禄二年己春

らんふやくはひふく黄くのみ葉は
吹あけくくくくくくくくくくく
改鴨くくく鴨もあハきく
七耀山を、出くくく、自
所くくく葉の葉くくく砂くくく
身くくくくくくくくくくくく

芭蕉

嵐雪

蕉

雪

坊より老といふは遠きく
七の隣つゝ神すかうり
生あよりえはく烟りあとなり
日くれて 赤る松り切りけ
赤白を捨るき版をつまじきて
洞ふほをよこは ちんちん
舌根の念仏をやく辰土衣
小城ハ稀の中はにけり立
杖をう川庄の石よなり
いかりあむんやおとけの月

、 葱 葱 葱 葱 葱 葱 葱

ちるこれと垣根をうろ嵐高
のまろよりをふ 萩の下よ
力のよきも中子の足跡よま泣く
いつこのうろ 楠の名をとる
柴のよのよき越ハ 破るより
續もよんより 噴ハ 馬石
よよりのよみてよき杖の足
整切育の月うを、先く
長門よりあのかの根よい
粥小卵ハ ながくと喰くお

葱 葱 葱 葱 葱 葱 葱

山系ふの好ハあ仙梅づとんき
 雪う鞠おく 夕費のる
 やりりまむ大江の春ハ八朝家
 削了屋の了 林路の了
 出深及もえとのとぬ重の所古
 祿宣の 袂う 袂も呪つ
 花とりり飽もものも ぞうん
 共こい と 田花路のま

蕙 蕙 蕙 蕙 蕙 蕙 蕙

松葉して梅あつたある白ひぶ
 蝶あつて 入らちの杉
 うさあつた 情も雪もやからん
 石のうほもた 暮をすりけり
 月揚る 春の 為をさし 変えく
 のうしん 猪北 帰る 芋畑

曾良 塔山 踏通 芭蕉 山 良

は 意をいそひとすれば 吃おて
うとれて 瑞々中の 戸のすま
松よ 目をほく 籠の夕月 秋
つれとて 一さき 谷のあくら
火とて げん岩の 洞あも あり
必を ながるとに のこは 唯礼
おとつる 父の 志とて 言はけり
折ふ のせとて とら の 秘りの
入る ちわたりよしの 花の 実
何や ちの 志

山 意 山 通 意 良 通 意 良 山

功を れ 意 肩とら 残 衣 小
あ やり ちの 志 けり 意
松の ぬふうと の わくの 遊く
ちの ありうとら 猿の 瑞々け
い ちよひも ちの 志 けり 意
ちの 志 けり 意

意 良 此 意 山 意 良 意 良 意 良

藤のつゝ家よわけても行くら
柚ありとてふ 竹の松明
五月と小袖のさしとぬきあは
あつる髪を とさひうろくつ
あつれてさへ人よりもあつ
細くさへさへあつるさへ
雪をうさへ火燧とりまて
よきあ けり日待 つまひ
梅の春も夏に友をう吹ま
相のさへさへさへけれ 山

山 嵐 蕨 山 良 蕨 山 良 蕨 山

橘車 鳴る赤ハ 月とされ
波ハつらさの石をうさへ
あつて 伊予さへいっ 輪
大お進さへ わられむさへ
城水のさへ雪さへさへあつ
起て火をさへさへさへ
けりゆりさへさへさへ月
組てこうせハ 麻さへさへ
山 風さへさへさへさへ
さへさへさへさへさへ

山 良 蕨 山 良 蕨 山 良 蕨 山

流るるうと身を帯ひむ物ぞん
あゝのゝ面をうなむこけつ
狼の息をて吹く 友の月
あの光をよ仏さあきて
まゝまゝ流防の渾身のあゝり
流るるうと身を帯ひむ物ぞん
何れも人の後者と身をけけく
強よ居れハ 朝のさきやき
一門乃ふ忍の流のさまゝり
友をつゝゝゝ 橋政の 翁

竹 錐 山 菜 良 意 山 嵐 竹 葉 意

那須余燃櫻桃を

たつた

株真ふ人をききりけ友聲を
まゝまゝいらいことこけけ枝の葉
むゝぬゝ市の飯屋を吹とりく
町の中央に 川おとの月
鷹の子をよゝ居をうゝおろす
飛乃すゝゝこれらりめんハ 竹

と世 櫻桃 良 桃 意

物して小笠よ息を折入る
こころのつらさのり合
るるに 火を焚ゆる處も折
笠人こころの二十六のちと
松のこゝろをさへてゆらん
香のこころをけりて遠く
藤おろしおろしと小笠よ炭俵
さわさわとるる尾連の居
あの月も雲のよさを燃ゆれば
あとも消す物めいさき

意 枕 良 端 枕 意 枕 良 端 意

綿繡よ時めくふのあつり
已のねよのさつあの小車
日傘のひさしをすうてまの座
衣を 袴をさうさよの舟
酒のあはれも朽木も仏なり
物人さうさ 松の松明
高武者の盤のるやまも枕
糸とくくとくとの言
日中の鏡つらさのあつり
一谷りすゝ 貞潔の堂也

良 里 端 枕 良 意 枕 里 端 枕 良

乞食とは云て浮世の物語り
洞の地蔵よこり。有明
尊のまふ猿のまゝや海つらん
舟をまゝとらう。海人采州
々々も又船自をねむるの上
米とさくら。以海のしるま
籠のまれまゝとこえてむらり
粟の風雅をりのにやつ
あつ。さし舟をまゝまゝて
泳をまららさ。こゝの味。

瑞 柷 蕉 軍 蕉 二寸 良 柳 林 鳴 上

風流れく。ち粟の田植く
いらこを。おて。おまうけ年
水せきて。うねのちや。きくん
鈴よ。鉢のきう。いくひさうり
一まう。く月よ。益さき。川柳
腐。くや。の。く。村う。杖。く。

芭蕉 等窮 川良 蕉 窮 良

街の女々上院を化子茶をさして
昔をたの〜やと懐じ〜さりの
ある時は様もゆかめ入ねん
樟の小枝よ 意をなして
〜〜〜嫁の島の名もめく〜
表す〜山や〜〜ふもひ
ほり〜軍をさす 関よあ〜
杖を〜〜のよ〜〜僧
文らねの壁つ〜破る麻の角
鳴の 凶 物をほ〜〜月

意 良 窮 意 良 窮 意 良 窮 意

い〜〜これ行をさよ〜〜りあて
う〜〜ふあ〜〜つ〜〜い〜
山々の尾よ〜〜〜ふ〜
弄り〜〜ころ併ぬつ〜〜さ
薪む〜〜あ〜〜一筋のた〜
おの〜〜武士のき〜〜高
〜〜〜ぬ〜のれ意の〜
言よめ〜〜〜〜名〜
〜〜〜〜〜〜と〜
何や〜〜のた〜〜ぬ七夕

意 良 窮 意 良 窮 意 良 窮 意

位なるやの櫃の月さく
すよあゝむと糸の髪
切袴 枝るはくにさう
右山 つくこの舞う
佛一さ湯ささくさ
教生るの下さ
糸をさるに掛りささひ
酒のまよひの 枝るさ
六十のなう人のさ
整廻する糸さ小袖う
枝る

良 翁 意 良 翁 意 良 翁 意 良

徳れ糸や目たね花を刺れ
すれあほさるのときさ
切糸もこの糸れ糸さ
畔つるさすれ 糸れ
たを結るさ糸さ
秋ささう糸の 結る

次 等 口 良 等 糸 良 次 等

待り矢のねれ露をををせく
 新をををめるあつきの茶
 松歯露に吹よるるまの書
 酒のそ浪をりよるる新
 新入る新にまてし新
 成れておられる竹城の
 多しさを新よるる新
 月のものつををををを
 独して少魚釣るる新
 笠の塔を下る草の松

葉 露 茶 書 新 酒 新 雲 竹 葉 新 葉

梅の出る初陽やよりの花の時
 うらめる谷の 征鼓 打く
 あつたはるるををををを
 ちゆのちれぬ馬鞍うらま
 よい新をいよるる新
 かつてし新の絲やきよる
 新露の夏はく古く沖にのま
 朴をうる 市の酒酸
 新傳に三社の酒をいよる
 乃る人合新をいよる

葉 露 茶 書 新 酒 新 雲 竹 葉 新 葉

徳を枕とす。山打り
松むすむ。金のさうじ目
永赤の古く。寺殿といふ。そ
復て合す。大徳の成
薫の香をわらふ。さうじ
瓜。むら。川。伊奈の名
寺。物。簾。見の遠入る
故。人。告。林。風
あ。う。井。の。月。影。れ
石。う。て。え。ひ。出。る。

水 良 葉 水 良 葉 水 良 葉 水 良 葉

花のほをれをわする。さうじ
鉢。心。山。竹の。塔
標。多。村。の。字。の。介。の。意。を。て
刀。り。す。甲。斐。の。一。札
岸。垣。人。も。と。ほ。ぬ。冥。に。なり
りの。ま。さ。ひ。は。刺。る。松。の本
軍。祭。う。こ。ハ。し。ら。く。れ。う。と
集。よ。花。女。の。名。を。と。む。目
麻。笛。よ。黄。を。て。お。り。や。り。結
采。り。に。出。る。お。海。を。と。り

水 良 葉 水 良 葉 水 良 葉 水 良 葉

錦つゝ暖木塔と堂のけらひよ
まゝく〜あ〜す 子日の証
古里の友と汝とありあり
も〜と滞する亦此のり合
雪こそ此所老の市のまらりそ
す〜とさみの目とま 席のあ
七人を古と懐残よりくられ
やりあり〜此のまら入ね
年つ〜と盤ハ残へさふの峯
山田の峰をい〜む〜ぬ

良 兼 水 兼 良 兼 水 良 兼

宵籠巾帯をの〜風の色
伯原と 人の話よ 友を
川舟の路よ 雪と 引とそ
物の形 汝よ 今あるまら
汝あに〜と〜る 娘のま
おも 弟も 昔あ〜と 打ちり

と兼成
雪丸
昔良
物雪
殊妙
兼水

籠の音を 鶉の鳴きと 矢ととよて
 藤のけし 藤のむら 藤のむら
 月山のわきの 風の骨うむ
 狐のむら 狐のむら 電のけし
 ちるむの けしととよて 心ち
 鳴子 鶉の鳴きと 藤のむら
 笠人よつたむら 藤のむら
 新も 藤のむら 藤のむら
 笠のさくれけしととよて 藤のむら
 まくおのむら 藤のむら

音 入 良 水 丸 音 箱 良 舎 水

出たつ藤の 藤のむらととよて 藤のむら
 藤のむらととよて 藤のむらととよて
 藤のむらととよて 藤のむらととよて
 藤のむらととよて 藤のむらととよて
 藤のむらととよて 藤のむらととよて
 藤のむらととよて 藤のむらととよて
 藤のむらととよて 藤のむらととよて
 藤のむらととよて 藤のむらととよて

風 藤 音 入 良 水 丸 音 箱 良 舎 水

燦々たる父ッ ち矢ととら侍人
手拭きて 赤と成るむら
梅のふん守とありふる瓶子
すれをあげてとありつとら
之をささる夏よ古のさりけ
浪の音す——万れとら忍
鳥あ〜ぬるつはこととらり
籠〜〜〜〜〜 猪のらま
しそ〜〜月を枝の小社とら
庭わ〜〜〜と 家〜〜〜と

意 浪 良 柳 木端 風 柳 意 松 端

ちる冬のくハ衣を 衣をぬく
うけらふよ 三由る庭おのら
たの〜いと茶をむととらその
果なき燕〜〜 ちとらとら
袖香炉とらりふ茶に立係て
やて心の草凡ほの〜〜
老僧のいて小堂とら〜
武士と〜〜れ入 赤ぬの門
自う〜麻も鳴る ちとらの
おかりた包む草〜〜の月

意 浪 良 柳 風 端 意 松 端

秋夕けり控ふにふむ 葎のうら
くま すすき くのく 谷くま
系るる牛を弱る夕まられ
水城の猿よ午ゆりくを火
きる 佐沛のあられも殊りて
よこれてさむく 祿匡のし強
ほりくしるのうらみの 露れり
し ちるふもぬのつれく
咲くくふをたよ 袖しよて
雪くくしりこてままふ 扇

良 瑞 柳 風 涼 蕉 端 風 蕉 柳

袖之浦江上晚望

あつとやわく 留けく夕涼
海和る磯く すすき 帆延
月也く 関屋をく 心 洒持て
亡しの 竜乃々々 輝風
中し けほりまきく 冬 柏
麦の たちまきく 義の毛

良 玉 蕉 良 不 玉 良

香厨殿。精洞の帝よその
火とたくほくしつたまて
満るハくらもささき切せとめ
松のちさる。浅深の七度
そまうしつちき慈も志多ひく
波の糸ふトしこと
池供しつわてあふ糸もあらん
こ乃世れ末もくうしつ入
船つら書帯らのひの参
々すいのらと精の乞食

慈 良 玉 慈 良 玉 慈 良 玉 慈

かきつる形。あると兼更おて
お原らの形れ 麻にの月
物とて研にむくくまの風
すしハ 勝よき由山ひめ
別かの踏つるつさる世傳ひ
枝をさきしつ塚のあつま
幼童ハよしあき岩を抜つて
えひまのきぬを踏くや位
聖しつむ厚を儀よせつて
月片くすまき 活中の帝

慈 玉 良 慈 玉 良 慈 玉 良 慈

御薬を真着の打くは返り入
小神と申すこと戒の所
和の原の母と申すもゆりて
其あはれぬおはれとも
なまの京持傳へる古今集
ふよ 舟と切坊の海蔵
くをいふれ業を立しむねつ
警たひうときて第ふよ丸
錦衣を作りて古き熱をむ
しむる色とこのむ言達

良 燕 玉 良 燕 玉 良 燕 玉 良

めつ〜や山と出ぬのまがな
せと車のおとろ〜 井戸
踏むのれい〜 扱と打て
宜 泳ぎれ 末乃三ヶ月
おんふらりの〜 なる〜 の家
銘小坊 標とけ〜

をせ成 重行 以良 良丸 行 良

山のくまきくさうけねけり
葉なるふあといふとまきし
葉解と日との母よふ胞く
らのらうと新なるの戸
赤櫻を母のうまに植おれ
花よ 妙す 小田のうりま
け杖も門乃板橋うつれたり
救急ふりれく しのひし月
きねくハむちも同くさの種
高の女乃姑きりのしけ

丸 行 良 行 良 行 丸 行

婿入の花さるるに打ち立て
りとの廊ハ 細く焼く
金銀のまも一ふよ 改り
茶良の坊よ 夏磨けし
い高ふはあしれとや谷あけて
祐まきさるるにれをいふ
をのけさハ目と泣くさうア
はくよ 友さ うとせて
子日の宿を 結よ小松原
塔半のくさうと強つあする

丸 行 良 行 良 行 丸 行

カハ埃の穴と差や免つん
さけて家々ささくさく下りも
ゆらゆら月をり御の元よとて
温あうらうら 陸奥の杖凡
とつ厚の比より之より氷のたや
山樵の作さ 妻のあきく
尾しるも男よまたらるらんよ
りよよよへさくさくのつま捨
分の所 写とやさしよるる
整ふきききききききききき

良 甚 九 行 良 九 甚 良 行 甚

跡の若將をよくに料進成をすん
種、さまきとて杖の日の影
月よりもし中め末にる次て
すさささささささ村の生垣
蹴蹴踏の門をさくして樵の香
小挿のしきり 結ふ 吹くれ
七より牛もしもおんの君
香を 散せり ぬの葉原

とせ致 一泉 左化 ノ松 休急 滝子 雲口 乙少

わ〜れ珠左の山ハ 菱のち
 持女にみ人田舎〜〜〜
 示ち〜〜〜ふ君の名も〜
 驚ハ〜〜〜と 急〜〜〜なり
 蓮の糸〜〜〜も中〜〜〜花〜
 先祖の糸と〜〜〜と〜〜門
 みるの糸の〜〜〜と〜
 霧 走〜〜〜 楓のち外
 秋風ハ〜〜〜のい〜〜も〜
 一〜〜〜乃 續〜〜 葬礼

枝 蕙 良 枝 蕙 良 枝 蕙 良 枝

それの吾ち 古よ 却の所 遊り
 去をのこせ 終 去 仍の箱
 古よ 此や〜〜〜 難波の貝〜
 沼の小 端よ 水 井 焼
 又〜〜〜に 去をぬの 埃〜
 ち〜〜〜と 眠く 度 面
 陸小神 ときもの 黄の 古風を
 北 苑人 ち 終 人の ち〜
 晴〜〜〜と 巻〜〜〜と 終〜
 おり〜〜〜と 終〜〜〜の 終

枝、蕙 枝 蕙 良 枝 蕙 良

幼翁心子の杖より後りして
小侯もいらり〜伊勢の神風
鹿瘡ハ素名目承もくやり也
るくれとまり 枇杷つくるまり
細さうき 仙女の姿たをやん
わつね〜ほるあれ〜浪
仲隠のう浪の細代と打るも
ち〜 丈を たいさ 口よ
鏡持く 控心花もらう〜
碓 起 人と 活をくれり

葉、枝、葉、枝、葉

こまより介らるる藤のるく〜
歩の〜いききと 蔭 緑の下
残れりむ夕る〜月す〜そ
あ〜またたび 片のこまうさ
柚木やい〜木より 形を返〜ん
食のす〜まぬ〜こハ おち〜ん

路通 葉夕 白之 新夜 とき夜 川良

肌をさして人よをさしたる夕まくられ
吹ろくの時す 時のとくし 所
境りのくさるた境し 破れ之す
細く 花のさく 鳴る 入り
月見ありきし 旅の宿家米
あふく の貝 旅のさる 布 袋
地獄路とくく さるの 旅は
旅の 旅の 旅の 旅の 旅の
街、垣根よるやむ 打もけ

夕 通 旅 本 因 夜 之 通 因 夜

夏 暮 びく 暮 暮 中 宿 宿 の 宿
宿 の 宿 宿 と 宿 宿 宿 宿 宿
也 月 や 暮 の 甲 と 宿 宿 宿
わ 宿 宿 宿 宿 宿 宿 宿 宿
宿 宿 宿 宿 宿 宿 宿 宿
宿 宿 宿 宿 宿 宿 宿 宿
宿 宿 宿 宿 宿 宿 宿 宿
宿 宿 宿 宿 宿 宿 宿 宿
宿 宿 宿 宿 宿 宿 宿 宿
宿 宿 宿 宿 宿 宿 宿 宿
宿 宿 宿 宿 宿 宿 宿 宿

之 慈 夕 良 夜 通 慈 之 夜

田をうき傳へるまじき 東門
犬 けえりしる 森の入りら
夕月 杖 笈を 居ふつと けりて
うろく 金さ 杖の 炭や 出
空く 彩 居を のめと 居るや
とや 過ぎきの うろく 株 わけ
おもしろて えや ととさる 朝 郎
まじりしりて 一りものまじり
夜を 居るまじりしりて 夕 郎
おもしろしりて 夕 郎

慈 夕 良 夜 通 之 慈 夕 子

いしりしりて 走り ありしりて けり
折 交よ まじりしりて つとまじりしりて
お 帯の 凡 ちび 比 けり 夕 郎
居 角 力 ちりしりて けりしりて
暮の 夕 郎 けりしりて けりしりて
けりしりて けりしりて 夕 郎

夕 郎 良 品 樽 凡 之 慈 去 芳 半 砂

鶉双の巻をきく定よ打ねて
りのくふしらも縄の若しよ
あやうのしり傳る海士つる
はれたすけくるれをうら
る残しのひくよをれうら
袴もくくくやまうれたり
るの音 侍輩を道のりくは
自入るるふのりくよ
杖凡のすれあふはき出で
箏よ せりりあ の心花

鶉 燕 風 紗 芳 燕 風 品 蕙

るくをれか幸小浮るさの居
おわり 抄くく ちの糸ま
袂立く 耕るをくくく
その元く 粧飾の若
とらうま 走下の白と出たり
とくし 打ねく 舞あ のあ
若くく 君の幸初答にほこれ
母くつれよ 終よ くさの戸
移くまも 訓れか 安さ 海のを
凡物 仕あま 酒のものを

蕙 芳 風 燕 品 蕙 紗 風 燕 芳

あれ髪をうらに生かすはなぐ
精とく重子おんこく
みよおきのさ萩の伐や
雨あつた烟あつたのあつた也
死しきくして長き秋死也
系とられきくはつた月の下
まの目のまめね眉のつら
母ひくく待つとまをれはら
水ひり水場の水くぬり
まくと動ぬるののころ

人 笠 泉 水 橋 人 水 泉 笠 人 弓

あつたまめね眉のつら
母ひくく待つとまをれはら
水ひり水場の水くぬり
まくと動ぬるののころ
まの目のまめね眉のつら
系とられきくはつた月の下
死しきくして長き秋死也
雨あつた烟あつたのあつた也
みよおきのさ萩の伐や
精とく重子おんこく
あれ髪をうらに生かすはなぐ

意 弓 水 意 人 橋 水 泉 笠 人 弓

終一牛をいけを釣り

水

きくくおく終

わくわくとすけと焼く

如行

舟の文をく竹一はゆき

夕道

舟あつて攪りきく

荷号

汐のくちをこわし海老魚

習水

あつて山をくきく

志成

時つく秋の階をほく

原

原のくもつたにすかひをわ
 添えいきふこのくわれ月
 着えりけ高屋ふたてつん
 理をけあれはる梅のゆき
 瓢箪乃大きき五るくりや
 風よりあれて帰る市人

越人
 芭蕉
 人
 蕉

幽

ふた事もまたあるきも名利の地
醫者の多き事目も厚く
いづれと師も此所に在り
いづれと寺も此所に在り
いづれと古きと書の名を
さ結とせぬ雨れあけ原の
きぬくやわらうはるくあそや
風もよたると念のうら
自もつとを登れ山嶺もす
細磯とあり舟はさきとあり

蕉人蕉人蕉人蕉人蕉人蕉人

月とこれ比良のき根をおろ
き存在のくろ乃肌ぬき
破れ戸の釘もあつてそのま
みせるともいふまのまきわ
泉もくつて根糸も包む十寸鏡
ものねりひかす神も此物い
人去ていづれと書名の白ひた
と川瀬よこもも堂れ片隅
ほろよふは嵐のあつて中ふ
垣撫乃ありきまかんとほり

蕉人蕉人蕉人蕉人蕉人蕉人

あぢふくはねの妹。ゆゑなる。先
阿のまゐいた。なまゝこ包む
此の月乃られあつて消すに
おねこしをく鞠よの妹あり
妹の田をうしおねこ事れも引く
市い〜る〜又字同〜ある
い〜〜〜もあ〜れも事を
能きすれりれ癒て〜い〜
これの比流成〜も〜
田〜〜〜〜〜

人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉

たえにんて音見よる。残衣分
凍片居る。さ〜拾りれれを
松風。移し。日向のすれと
鶴 白き。の ありており〜ら
水 海〜すれゆれり。の 秋の書
るよ。山の 塔〜。月の 一もら

冬 雪 鳥 相 春 兮 雪 水 狂 音

まわくちをけりしと春をにけり
眉はけりしもぬるうに女
さあまはけりしもうけふ歌を
けりし歌の水のけりし
さうけりし布を春をうけふ
涙うけりしよけりしえし
門のけりしけりし人けりし
爰小雨をぬれぬる
よきぬにぬるぬのきりし
おぬるなるくと猿つりし月

人雪意写水碧相眉舟承越人

山巻

三十四

うらと社に小町のきりし
ぬるぬるぬるぬるぬる
尾寺のまゝ雨をけりし
ぬるぬるぬるぬるぬる
ゆきけりしぬるぬるぬる
布をけりしぬるぬるぬる
ぬるぬるぬるぬるぬる
食をぬるぬるぬるぬる
ぬるぬるぬるぬるぬる
ぬるぬるぬるぬるぬる
ぬるぬるぬるぬるぬる

水象碧意兮人雪碧相象

山巻

三十五

幽雅

蝶のまに昔の衣も月より
 ほろもいづいお花くらゝいづい
 月一のよ火智を消てよと入
 りのまに君をおと秋風
 け橋を好もて帰る雪方の中
 山平一しゝくまの物る 弱
 毛しうけして一投はくじらたう
 いつゝいふふもいふもいふ
 夢つれ中しもほほやま

相 人 兮 意 象 雲 桐 水 年

七の秋や
 七の秋や
 七の秋や

初秋の海平し田中くきり
 空のしきれ 口しりれ月
 空の底 雲のけりて
 やせし 蕪の糸 糸の
 輪のり 糸のり 糸のり
 糸のり 糸のり 糸のり

七 年 意 如 安 自

幽雅

三十一

白雨の空一くくはるの御
田くくふしけり海の御をの
此乳うひてさうふ物やさあむ
おひみあされまの園之
琵琶弾くく音ハ泣て思ふ人未
錦巻乃ちさくし知れくろ
新くき丸の鬼のうけさみ
腕繰腕さく入相の懐
歩漱川むくま南カとくそ
樽切りさき月と砂りり

風 足 風 足 風 足 風 足

都の雲霧にふきさくさくりや
あかりさき寺のさくりや
水田の橋がくはるたくさ
白鷺さくさくさく市
まくこれ羽衣さく布さく
夕ふ一七日戸姥さく
かこる百そのさくさく
あまはさきん人ハの
湯わりた乳さく伽藍と焼さく
むし和さく乃木坂

足 牛歩 足 足 足 足 足 足

三十一

三十一

思のこられ、あつらひの葉の種
魚つむねの岸よりうらやま
身の身の端の気食とらうと果
次中よさむよ、ゆくれの風
猿のまね親ならうくまひの心
りくすも、海も、葉の戸の伽
石やうとうさうりなる、祖のそら
杉葉師、まに、はくく、つむ
かん片、あふかお娘、しむれく
あつらひを、ちやす、壽、あれ蘇

葉 屋 足 足 足 足 足 足 足

貞享五戊辰七月廿日

於此葉水長虹真行

葉釋、まも、あ、く、あ、く、あ、あ、あ、あ
やふ乃、ゆ、く、く、く、く、く、く、く、く
輝の、ま、あ、り、終、に、ま、ま、ま、ま、ま、ま
月さき、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま
ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま
ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま

とせ河 長虹 一井 胡及 人

懐ふ娘さし扱くさしとれ
下戸をふくめれ雪杖の亭
あ候の梅をふまふたしく
嫁せぬ。むすめれ肩こてわ
思ひぬふすこきなみ垣の表
滑きやちせ。ふゆのみり火
明やまきあをよけとる指立
何をさしり。郭をや
荒よと。石のきりりのつま
すこれらうとらひまられ夕暮

及 与 洋 及 人 与 瓶 弾 缸

姥麻さし高き所をれ夕月夜
庭ちくせりく。ほも。うけ 雪
とやくや。危をあ。き。茶。焼て
残。瀧をく。御。幸。有。言
此。持。の。庭。の。く。を。流。る。ひ。川
隣。子。わ。れ。ん。ま。り。や。燈。火

七段 一井 瓶人 冒岩 荷分 燈火

起もせしずしる白ひぼろろし
くしりし一葉れ汗ぬらひ居る
麻布を纏ひ家内しに織無く
菫とよとよこえはねらこせりま
ゆらとられ先よまこゆる雷のちり
るもあやうめ山條の霧
けをくしれし矢を袖か袖をせ
飛ちわくはけとありしる月
木くしにららてふ乃くらら
とらひにけしとくやんる也

東臈
葉
松
竹
人
菫
兮
松

餞別會

猿人と家名よりれんをくしれ
糸片しむきを高くあし
鶴鶴の心はと世のたのしき
根をくしりし山陰の鶴
うけありしまき生れ家の沙路
新しき葉し巻月々葉を
中の奴画工一連れ帰る也
鶴調くしりし漢舟

芭蕉
由之
其角
枳風
文鏡
仙化
魚見
観水

神垣や次骨之儼き波のひら
齡ときをくし連 まうく若き
酒のこふささくち連のまひあく
お月れ雪を揚るはくそ
鰯^{ヤナ}は神つてくちりあぬ川
麓 一面くあるくし 枕
るしーれ里ふあを借あ
月ふやほん 泊ぬの 薔人
着るくく白しも都なつて
ゆりあを 一を 洞ふ 傀 俣

全峰
嵐雪
枕雪
薔
之
角
風
縞
化
舉

途中にたてて車れ麓まをく
沖こく舟ふきけくき流
花れり名れはく波そあし
河くく原のふけ 此の自
羽の奉まけくま世れ外よ入
まれぬけめの 高を焼 友
老の身乃 繩ちふ程まほま
君流りくはれ 周ち
唯まけく河のねをまてつ
高をぼりく 舟く 遠く 盤

薔
之
雪
舉
水
化
之
薔
白
角



